

2018/12/23 クリスマス礼拝のメッセージより

「光は闇の中に輝いている」

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」

(ヨハネ 1:1-5)

神は私たちを言葉によって造ったと聖書は教えています。世界中すべての人が、「言葉」という概念を持っているのは、私たちが神に造られ、神がおられることの証しです。そして、神は闇の中に輝くためにこの地上に來られました。それがクリスマスです。

多くの人は、神とは何でもできて自分の願いをかなえてくれる方だと思い、そういう方なら信じようか、などと思うものですが、イエス・キリストは、私たちが考える神とは少し違います。それは、「闇の中に輝く方」だということです。つまり、自分が闇の中にいることに気づかなければ、神を見ることはできないのです。

イエス・キリストが來られた当時のイスラエルは、まさに闇の中にありました。ダビデ王によって築かれた強大な国家が崩壊し、分裂して残った部族はバビロンに捕らえられ、ようやく解放された後はローマ帝国の属国として奴隷同然の扱いを受けていたのです。先祖の栄光を失い、神の約束を見失い、闇の中にいたからこそ、彼らは救い主を見つけ、その信仰が全世界に広がって行ったのです。

人は、闇を知り初めて神を見ることができるようです。私たちにとっての闇とは、どのような状況のことでしょうか。

1. 患難

予期せぬつらい出来事は、人を闇の中に突き落とします。

かつて、ミス青森に選ばれた女性が、その美しさを妬んだ同僚から、顔に硫酸をかけられる事件がありました。顔中に大やけどを負い、以前の容貌とはまったくの別人になってしまった女性は、絶望のどん底に突き落とされました。しかし、そんな時、病院の窓から教会の十字架を見つけ、やがて彼女はイエス・キリストを信じるようになりました。彼女は、絶望の中で、希望の光を見出したのです。しかし、それでも同僚に対する憎しみだけは拭い去ることができず、苦しみぬいた末、ついに彼女は、イエス・キリストはこんな自分のために十字架に架かってくださったという事実を胸を打たれ、相手の女性を赦す思いに変えられました。これまで相手を憎めば憎むほどつらく苦しんできた彼女でしたが、一連の苦しみを通してイエス・キリストを知ることができ、キリストの本当の愛を知ることができたと、相手の女性に感謝を伝え、和解するまでに変えられたのです。彼女は、闇の中で出会ったイエス・キリストと、人格的な交わりをすることを通して変えられました。

患難に出会う時、初めはなぜ自分がこんな目に遭うのかと腹が立ち、絶望する思いを抱くものですが、その闇の中で、人は今まで見えなかったものが見えるようになります。それが、

イエス・キリストです。イエス・キリストという希望の光に出会うことで、患難は感謝に変わるのです。

2. 弱さ

予期せぬ出来事だけでなく、自分の弱さ、自分の無力さに気づく時、それもまた人にとっての闇となります。

西郷隆盛は、二度の島流しに遭い、自分からはまったく身動きの取れない状況に置かれました。その時、彼は漢訳聖書に出会い、聖書の神を知ったのです。

私たちも同じです。友から裏切られ、誰も味方がいなくなった時や孤独の限界になった時、自分ではどうすることもできない無力に陥った時こそ、神は私を愛しているという真実な愛を見出すことができます。自分の弱さに出会う時、それは神に出会う時でもあるのです。

その後、西郷は、その著書の中で、神は私たちを愛しているのだから、人を責めたり咎めたりするのではなく、人を愛することを教えています。そして、人生で最も大切なことは、神を敬い人を愛することだという、有名な「敬天愛人」という言葉を残しました。彼は、自分の無力さを知った時、イエス・キリストの教えを通して光を見つけ、人生が変えられたのです。

3. 罪

すべての人が抱えている闇、それは罪です。私たちは、どうしても罪を犯してしまうものであり、誰もが人には言えない罪を抱えています。しかし、自分の罪深さを見つめることができないために、自分自身に目を向けようとはせず、一生懸命目を外に向け、愛されようともがいているのです。

初代教会の時代に伝道者として活躍したパウロは、良いことかわかっても実行できない自分をどうすることもできず、なんと自分はみじめで罪深い人間かと絶望した時、イエス・キリストと出会い、助けを求めて、罪が赦されたことを知ったと告白しています。自分の罪を通して神に出会ったことが素晴らしい出来事であったため、彼は自分を「罪人のかしら」と呼ぶようになりました。

患難であろうと、弱さであろうと、罪であろうと、私たちは絶望する時、イエス・キリストが見えるようになります。つらいことが起こると、なぜこのようなことが起こったのかと、くよくよしてしまいがちですが、実はそこに光があり、その光によって希望を持って生きられるように変えられるのです。

ですから、聖書は「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。」(ヤコブ 1:2) と患難・試練を喜ぶことを教えています。それはその中にこそ光が見えるからです。

私たちは、絶望を避けて通ろうとするものですが、絶望の中にこそ、神の光が見えるのです。「楽しい」「嬉しい」「面白い」と思うところには、何も見えません。イエス・キリストは闇の中に輝く方です。自分の闇に希望を持ちましょう。そこで見つけたイエス・キリストという希望の光は、闇を完全に打ち砕きます。これが、クリスマスに神が私たちに届けてくださった福音です。